

一九六〇年代初頭、新疆ウイグル自治区から 国外移住した「新疆人」を追って

水谷尚子



はじめに

中国には「新疆人」という言葉がある。それは狭義にはテュルク系民族ウイグル人を指すが、広義には新疆ウイグル自治区出身の、全ての人々を意味する。本稿では、広義の意で使用することとする。

新疆ウイグル自治区は、モンゴル・ロシア・カザフスタ
ン・キルギス共和国・タジキスタン・アフガニスタン・パ
キスタン・インドの八カ国に国境を接し、中国の民族分類
でいう「十三の原住民族」（ウイグル・カザフ・回・キル
ギス・モンゴル・シボ・タジク・満・ウズベク・ロシア・
ダフル・タタール・漢）が、様々な時期に流入したり流

出してきた複雑な歴史を有している。[↑]

中華人民共和国建国以降、「新疆人」の国外流出には幾
度かの大きな波があった。

最初は一九四九年。中国共産党が政権を奪取した直後の
頃で、中華人民共和国政府新疆省のウイグル人官僚や民族資
本家、回民らがインドを経てトルコやサウジアラビアに、
政治亡命した。サウジのジッダやメディナには、この時期
に定住したウイグル人集落がある。

第二期は一九五八年頃から一九六二年頃で、それは大躍
進政策とその失敗もたらした大飢餓の時期とも重なり、
経済移民や政治亡命を求めるウイグル人、カザフ人、回民
などの民族集団が大勢国外に移住した。さらに中ソ関係の
悪化から、「東トルキスタン共和国」に関係した人々も旧

ソ連に移住した。現時点に於いて新疆ウイグル自治区からの流出人口はこの時代が最も多く、一九六二年に発生した「伊塔事件」（イリ・タルバグタイ事件）時だけでも「六万人を超える辺疆の民がソ連に越境していった」とされる。主な定住地はカザフスタンのアルマトイとジャルケント、キルギス共和国のフルンゼ（現在のビシュケク）、ウズベキスタンのタシケントであった。

第三期はソ連邦が崩壊し、中央アジアにカザフスタン、キルギス共和国、ウズベキスタンというテュルク系民族を主体とする国々が独立建立した一九九〇年代である。中国では改革開放政策が軌道にのった時期にあたる。国を持つことが叶わなかった新疆や中央アジアのウイグル人の中には、この時期ウイグル人を主体とする国民国家建設を夢見て、反中独立運動に身を投ずる者が現れた。しかし、中国政府の武力鎮圧に伴い、活動家は中央アジアやパキスタン、アフガニスタン、トルコに逃れていった。一方、中央アジア諸国では、各国の主体民族が人口に占める自らの割合を増やすため、積極的に新疆ウイグル自治区からの同族移民を受け入れ、カザフ人はカザフスタンに、キルギス人はキルギス共和国にと、合法的移住者も増大した。

第四期は二〇〇九年以降である。ウイグル人と漢人との大規模民族対立「ウルクチ事件」をきっかけに、東南アジアを経由してトルコに逃れるウイグル人が急増した。二〇

〇一年の上海協力機構成立から中央アジア諸国は、新疆からの亡命希望者を中国へ強制送還するようになったので、遠くとも比較的安全なルートとして雲南や広西から密出国し、テュルク民族国家の雄であるトルコをめざす方法が選択されるようになった。中国共産党は、新疆で行っていたウイグル語による教育を二〇一〇年から段階的に放棄し、二〇二〇年には全教育を漢語で行うよう教育制度を変更し、漢人への同化を促進させている。二〇一三年には習近平国家主席が「一带一路」政策を提唱し、中央ユーラシアへの通り道となる新疆には漢人流入が増え、再開発のための土地接収が行われた。こうした背景から民族存亡の危機を感じたウイグル人の多くが、トルコに逃げ出していった。トルコ在住ウイグル人の数は、それ以前の三倍にあたる約三万人にまで増加したと言われる。だが二〇一四年タイでの一斉検挙と二〇一五年の中国強制送還から、不法出国は現在ではやや下火になっている。

これら全時期を各民族ごとに検証するには、紙幅が足りない。ここでは文化大革命が始まる前の時期、つまり大躍進政策とその失敗が顕著となった時期（前述の第二期）に絞って、「新疆人」の国外流出と他国への定住、定住先での生活について、筆者が中央アジアとトルコで行った調査記録を纏めてみたい。

一 一九六二年「伊塔事件」と 中央アジアへの越境者たち

中国領域内に約二千万人ほどの人口を有すウイグル人は、中央アジアにも少なからず居住し、カザフスタンには二五万人、キルギス共和国には約六万人が生活すると言われている^③。中央アジア最大のウイグル人人口を有するのはカザフスタンで、この地でウイグル人が増加した最大原因は、一九六二年に発生した「伊塔事件」（イリ・タルバガタイ事件）であった。

伊塔事件とは、ソ連の駐新疆イリ領事館が、ソ連領域内での出生証明書やソ連在住親族からの招聘書、ソ連国民証があればソ連領に出国できると宣伝伝達したことを契機に、一九六二年、とくに四月から五月の間に中国領に居住する大勢の人々が、ソ連側に越境していったことをさす。東トルキスタン共和国時代の政治家や軍閥係者、労働者や農民、知識人も芸術家も、カザフ人もキルギス人もウズベク人も回民も、そして当時の政権の政治幹部まで、ありとあらゆる人がソ連側に越境移住していった。

こうした越境が起こった背景として、三つの要因が考えられる。

一つは、一九六〇年代初頭からの中ソ両共産党の関係悪

化である。中国共産党が毛沢東への個人崇拜を強め、無秩序経済政策「大躍進」を掲げた社会混乱期に、ソ連は米ソ協調路線を執り、フルシチョフがスターリン批判を展開していた。中国共産党は一九六一年一〇月、ソ連共産党第二十二回代表大会に参加していた代表団の一部を会議半ばに帰国させるなど、政治路線の違いから対立色を強めていく。

二つめは、一九五八年から一九六〇年の間の三年間にわたる大躍進政策の失敗である。大躍進政策は、国家経済の失速のみならず各地に深刻な飢饉をもたらし、新疆では一九六〇年三月アクス地区バイ県で五千人近くの餓死者を、自治区全体では七千人あまりの餓死者を出したと言われている^④。現在の朝鮮民主主義人民共和国の人々が中国に逃れて来ると同様、当時の新疆人民にとってソ連は、食べていて生活に希望が持てる場所と見えたのであろう。

三つめは一九五七年反右派闘争に代表される階級闘争による人心の疲弊と、中華人民共和国新疆に暮らすエスニシテイの人々の、中国共産党への懐疑と不信である。

こうしてイリ、タルバガタイ地区を中心に約六万人の人々が出国し、そのうち越境者数はタルバガタイ県（現チョチエク）では人口の六八%に上った^⑤。ソ連からすれば越境促進宣伝と受け入れは、労働力不足解消と中国への外交的播さぶり、中国領域内の自国民救済という複數要因があった。

以下、筆者が数度にわたって中央アジアを訪問し、中国新疆から旧ソヴィエト連邦へ一九六〇年代に移民もしくは政治亡命した、越境当事者に聞き取り調査をした結果から、特徴的な事例を数点取り上げて、その語りを紹介する。

(一) カザフスタンに定住したウイグル人と

一九六〇、七〇年代の民族運動

伊塔事件発生時、中央アジアへの移民は、新疆コログラスから出国してソ連のジャルケントに抜ける方法が一般的で、旧ソ連邦カザフスタンは新疆からの越境者の通り道であった。しかし、この通路も一九六三年には両国対立に起因して閉鎖される。現在カザフスタン人口の％あまりがウイグル人で、中国と国境を接する地域（アルマトイやジャルケント）に特に集住している。

中ソ対立の時代、ソ連諜報機関KGBは、中国から越境してきた人々から新疆事情を聴取し、中国文革前後の新疆情勢をかなり正確に掴んでいた。そしてソ連は、中国を脱したウイグル人の民族意識を巧みに利用し、彼らを対中宣伝工作に利用した。「ウイグル人著名作家」ズイヤ・サマディ (Ziya Sameiti) を始めとする「国家分裂主義者」は、KGBの庇護下にあった」と中国の中央アジア研究者李琪が指摘するように、在ソ連のウイグル人もまた、自民族解放運動を有利に推進しようとソ連政治に自ら接近し、進ん

でソ連の対中工作に関与した。

アルマトイ在住のウイグル人民族主義者で、ソ連時代にはアフガニスタン紛争にも従軍した元軍人のカハルマン・ホジャムヴェルディ (Kaharman Hojamberdi) によると、「一九六〇、七〇年代は、ゲニ・バートウル (Gani Barur) がウイグル民族運動のイニシアチブをとり、ソヴィエト政権や国際組織への働きかけをしていた」という。カハルマン曰く、「カザフスタンのウイグル人民族主義者たちは一九六三年、ウイグル人の新疆での民族自決や独立をソ連は支持してほしいとの旨の嘆願書をソ連中央委員会宛に送り、一九六八年にはブダペストで開催された世界共産党・労働党会議にアピール文を送ったが、ソヴィエト政権はウイグル人民族主義者の思うとおりには動かなかった。この頃アルマトイで設立されたウイグル民族組織「祖国解放委員会」は、刊行物『ウイグルスタン』を発行し、組織の主要メンバーはカザフ、キルギス、ウズベキスタンとモスクワ在住の新疆出身者で、東トルキスタン共和国時代の政治委員だったズナン・タイイプ (Zunun Tayyip)、作家ズイヤ・サマディ、文学者で元新疆ウイグル自治区歴史博物館館長ユスフベク・ムフリスイ (Yusubek Mukhlisi)、東トルキスタン共和国軍の元兵士ヤスィン・イミノフ (Yasin Iminov) とトウルスン・ダリヤ (Tunsun Dariya)、詩人ドルクン・ヤスィン (Dorkun Yasin) 等であった。同組織はソ



カハルマン・ホジャムヴェルディ
(2009年9月筆者撮影)

連共産党中央委員会の指導と監視を受け、全ソヴィエト・ラジオ海外編集部中国課主任であったヴィクトル・クリコフが深く関与していた」(二〇一〇年九月聞き取り実施)。
中国の文化大革命に当たる時期、中ソ国境線の新疆コロシアスと接するカザフスタンのジャルケントには、ソ連の対中プロパガンダラジオの拡声器が設置され、中国共産党を批判し、いかにソ連が豊かであることを宣伝するニュースがウイグル人の声によって放送された。プロパガンダ放送にはウイグル人を使いながら、ウイグル人が希求した「独立運動への支持」にはソヴィエトは明言を避けた。このラジオ放送は、当時新疆の国境線に暮らしていたウイグル人から言わせると「弊害も多かった」という。その放送を真

に受けて、すでに閉鎖されている国境越えを執行し、中国人民解放軍国境警備隊に射殺された人々は少なくなかったからである。
カハルマンによれば、同組織は国外にいる亡命ウイ

グル人組織を一本化する道を探るためイスタンブールに使者を送り、元中華民国新疆省政府高官であったエイサ・ユスブ・アルプテキン (Eisa Yusup Alpekin) との連携を試みたことがあるという。一九八〇年には前述のズイヤ・サマディやエイサ・アルプテキン、チベットのダライ・ラマ等がインドで会議を開き、中国にどう対峙していくか話し合いもした。だが、ソ連とトルコが決して良好な外交関係を有してはいなかったこと、エイサが反共思想を有していたことなどから、ソ連とトルコのウイグル人団体一つに統合して活動を共にすることはできず、亡命チベット人組織との共闘も叶わなかった。

以下、ソ連時代の対中プロパガンダ活動を直接的に知るウイグル人で、現在もアルマトイ在任のリザ・サマディ (Liza Samadi) 氏へのインタビューを紹介する。

ソ連の対中謀略放送アナウンサー、ウイグル人リザ・サマディの口述(二〇〇九年九月、於リザ氏自宅アパートメント、ウイグル語⇄漢語の通訳付で対話)

私は一九三八年にグルジャで生まれ。一九五九年ウルムチ師範学院を卒業してからグルジャ(漢語でイリ)第二中学校に教員として赴任し、一九六一年まで働いて同年に出国した。

私の父は著名な作家で民族主義者のズイヤ・サマディ



リザ・サマディ（2009年9月筆者撮影）

放された。一九六一年グルジャに帰ったが、政府の要職には戻れなかった。そのような父の事情もあって私は党から目を付けられ、しょっちゅう強制労働にかり出されるなど嫌がらせを受けていたから、見かねた友人が「このままだといずれ殺される。ソ連へ出国しなさい」と忠告してくれた。カザフスタンの作家たちの働きかけもあって、私たちはソ連のパスポートを取得できた。いざ出国という時、父は「先に行きなさい。君らに迷惑をかけたくない」と言った。父が同行することで、何か問題が起こつて全員が越境できなくなることを危惧したのだから、母と共に先にアルマトイに向かい、父も後で合流した。

ここに来て最初の一年間は、ウイグル人居住区スルタン

で、「東トルキスタン共和国」政府に關

わり、新疆ウイグル自治区では文化庁長官の地位にありながら、一九五八年から始まった百家争鳴で意見を求められて中国政府を批判し、その結果、全ての役職を解かれコルラに下

コルガンのウイグル人学校「二〇一学校」で言語文学教員として働いた。

一九六三年にラジオ局員を募集していたウズベキスタンのタシュケントに行き、マイク試験を受けて合格し、タシュケントラジオに就職した。モスクワから資金が来る国営放送のタシュケントラジオは一九六二年頃の設立で、私が赴任した年にウイグルセクションには七人の局員がいて、私を入れて八人体制になった。英語、ペルシヤ語、ウルドゥー語などのセクションもあった。ウイグル語放送は一日一時間で、毎日三〇分間の放送を二回、繰り返し放送し、番組内容はロシアのタス通信からのニュースが多かったが、メインはウズベキスタンに住むウイグル人の生活に根ざした諸情報だった。中国で発生した事件も比較的报道していた。

一九六六年カザフスタンのアルマトイに戻って、アルマトイラジオのウイグルセクションにアナウンサーとして勤務した。アルマトイラジオは一九五九年頃に設立され、当時はドイツ語、韓国語、ウイグル語などの番組があり、ウイグルセクションは六人体制だった。番組内容は基本的に、カザフスタンに住むウイグル人の生活に密着する話だった。

その頃中ソ関係は悪化するいつぼうで、一九六四年中国が核実験を成功させると、ソ連は、モスクワに一九六

八年から対中謀略ラジオ放送局「救国ラジオ」(Weenni Qunuldurush Radios)を設置することを決め、ウイグル人など新疆ウイグル自治区出身者を選抜し、配置した。私はそれに選ばれ、一九六九年から一九八六年までモスクワで暮らした。漢語、ウイグル語、カザフ語の番組があり、漢語組が一番多く七人位、ウイグル組は四人で、カザフ組は二人だった。

放送記事は週に二回、専門の審査員が事前審査する。ソ連当局やKGBから「発表してよい資料」が届けられ、それに基づいて中国の政策や状況を批判する記事を書いてロシア語訳し、ロシア人の審査を経て報道した。審査員は我々が審査後の記事と違う内容を流すことを警戒していた。新疆情報は、主に新しくアルマトイに逃げて来た人々にインタビューして得ていた。アルマトイ以外にもインタビューは行っていた。多くの人が中国領から逃げてきたが、一部はソ連当局に逮捕拘束され、長い間、取り調べを受けていた。こうしたKGBの審査結果からも重要な情報が提供された。

中ソ国境ジャルケントの果樹園の中に発信タワーを設け、新疆ウイグル自治区に向けてラジオ放送した。毎日放送する内容をテープに録音して飛行機でモスクワからジャルケントに運んだ。当時の中国は文化大革命期で貧しく、ジャミング(妨害電波発信)をする施設も設置できなかった

たので、けっこう綺麗に聞こえたらしい。地下室でさえ音をキャッチできたとの証言もあった。救国ラジオは嘘えれば、アメリカのラジオ・フリー・アジアのソ連版みたいなものだ。ウイグル人が中国に対して言えなかったことを放送したのだから、救国ラジオは大きな役割を果たしたとは思っている。

ゴルバチョフはソ連共産党書記長となった翌年の一九八六年、極東ウラジオストクで中国との関係改善を呼びかける演説を行い、両国関係が大きく変化した。私はその年に救国ラジオ局を辞め、アルマトイへ戻った。

アルマトイのラジオ局に戻ると、ウイグル語セクシヨンのトップになった。毎日一時間の放送枠を、後に二時間に延長させた。しかし、ソ連が崩壊し、カザフスタンが独立すると経済状況が悪化し、多くの局員が解職され、最終的に私だけ残った。優秀な局員は沢山いたのに申し訳ない気分だった。定年になっても残留を進められたが、「私の退職金の半分で一人を雇う」との条件を提示し、新たなウイグル語アナウンサー、グリ・ジャマル(Guli Zhamal)に来てもらって引退した。現在では一週間に二〇分しかウイグル語放送枠はない。

(二) キルギス共和国カラコルの ドウンガン（東干）とウイグル人

キルギス共和国のウイグル人コミュニティについては、過去に拙稿「キルギス共和国のウイグル人」で詳細に述べたとおり、首都ビシュケク及びその周辺は、一九五〇、六〇年代に新疆から越境してきたウイグル人がソ連政府に仕事と住居を割り振られて定住したケースが多く、カザフスタンのウイグル人定住者が著名人や活動家が多いのに比べて、キルギス定住者はブルーカラーが中心であるのが特徴であった。現在、キルギス共和国のウイグル人は、民族組織「イッテイパク」と同組織が刊行する新聞『イッテイパク』によって緩やかに繋がっている。新聞が各コミュニティの情報伝達手段となっているのだ。

キルギス共和国の首都に暮らすウイグル人は同族間で伴侶をさがすことが多く、ウイグル人だけで密なコミュニティを作り、他民族との交流が比較的少ない。他方、同国各地方ウイグル人コミュニティは住民のほとんどが清末移民で占められ、中華人民共和国成立以後の移民は少ない。ソ連時代の教育を一律に受けた人々は、「自分たちはソ連人である」との意識を教えられたために、他民族と通婚する事例も極めて多く、濃密なウイグル人同士の人間関係を有している首都ビシュケクとは異なる。ここでは同国

東部のカラコルでの聞き取り調査を取り上げる。

二〇一〇年九月、筆者はキルギス共和国ウスク・キョル州の州都カラコルを訪ねた。カラコルは一八六九年に帝政ロシアが砦を築き、それからロシア人が入植して地域最大の町となり、一九四一年から一九九一年まではロシア人探検家にちなんでブルジェバリスクと呼ばれた。清朝末期のイスラム教徒弾圧を逃れてやってきたドウンガン（現代中国の回族に相当）やウイグル人がこの地に定住し、遊牧を糧としたキルギス人もソ連時代に定住し始め、現在では天山登山客を迎え入れる観光地でもあり、地方の小さな町ながら多民族が共に暮らす国際色豊かな町となっている。

筆者がカラコルを訪問したのはイスラームの断食明けの祭「ローズ節」にあたり、小さな町の一角にある通称「ドウンガンモスク」（正式名称はイブラヒムハジ記念中央ミジッテイ）には、この地に暮らすムスリムの男たちが大勢礼拝に訪れていた。清末に弾圧を逃れて移住したドウンガンが出資して一九〇七年から建設し一九一九年に完成したモスクで、柱には桃果の彫刻や華やかな色づかいが施された中国風のしつらが美しい。カザフスタンのアルマトイやキルギス共和国の首都ビシュケクでは、ウイグル人が建設したモスクにはウイグル人の、ドウンガンの建設したモスクにはドウンガンの宗教指導者がいて、主はその地域に居住する者が民族ごとに集まる、という「棲み分け」が

なされていたが、カラコルはそうではなく、多様な民族が一堂に会していた。ドゥンガンモスクから目と鼻の先の距離には、一八九五年建設のロシア正教「至聖三者聖堂」もある。

ドゥンガンモスクで受付をしていたのはカラコル生まれのウイグル人パルハット（Paltat、苗字非公認）で、一九五七年に父がイリからこの地に移民したという。パルハットは「一九六二年に新疆から移民した回民のヤフブ・イスマイロフ老人は、東トルキスタン共和国の民族軍に志願した人物で、漢語が流暢だ」と、車でカラコルの町外れにあるヤフブ家に案内してくれた。ヤフブ家では曾孫が一歳になつたお祝いとローズ節を兼ねて、沢山の客人が集まり、宴会の最中だった。そこに集まつた人々を見ると親族のドゥンガン、ウイグル人数名、ヤフブ同様に民族軍に従軍した経験を持つ新疆出身のキルギス人（正確にはキルギス人とウイグル人の「混血」）など、この町と同様に多民族が集っていた。

カザフスタン、アルマトイでの調査では、長く政治運動に明け暮れ、ウイグル人の間で人間関係が疲弊して見えたが、この田舎町にはそのような風は全く感じられなかった。

ドゥンガン（東干）、ヤフブ・イスマイロフ・馬の口述記録
（二〇一〇年九月、於ヤフブ氏自宅、漢語普通話で直接対話）

私は一九二九年グルジャ（現イリ）生まれで、八一歳だ。私の父カーディルは清末にカラコルに移住した回民で、一九二〇年代にグルジャで農産物の商いを始め、その後再びグルジャに移り住み、生活していた。清末の頃、一族は「馬」姓を名乗っていたが、現在はロシア風に姓を変え、馬姓は名乗っていない。六人の兄弟姉妹——兄・姉・私・弟二人・妹——はグルジャで生まれ、私以外はイリやウルムチに今も暮らしている。

私はグルジャのタタール人学校で一九三七年から一九四四年まで学んだので、変形アラビア文字綴りのテュルク語系言語の読み書きができる。この学校には回民の生徒は少なく他民族の子供たちばかりだったので両親が私を通わせたのは、タタール人学



ヤフブ・イスマイロフ・馬
（2010年9月筆者撮影）



東トルキスタン軍（1940年代、ヤフブ氏保存）

校はレベルが高く開明的だと当時各地で評判だったからだ。ロシア語は自学で習得した。漢語は日常、家庭で使っていたので話せるけれど、読み書きはできない。子供の頃は漢語の簡単な読み書きができたが、使わないのですっかり忘れてしまった。

一九四四年からは政治的混乱から、とても勉強を続けられる環境ではなくなり、一九四七年東トルキスタン共和国民族軍に志願して従軍した。新疆省連合政府が崩壊し、中華人民共和国となつてからは中国人民解放軍の兵士となり、一九六一年に軍を離職するまで計一四年間も軍人として働いた。元民族軍兵士代表として北京に行つて、朱徳將軍と会つたこともある。

私は一八歳（一九四七年）でソ連の公民証を取得していたので、ソ連公民帰国運動が始まるとイリのソ連領事館に申請し、妻と五人の子供たちとともに、一九六二年カラコ

ルに移住した。現在、私には一八人の孫と二〇人の曾孫がいる。前妻は一九九八年に亡くなり、今の妻は後妻だ。新疆には一九八五年以降五回ほど親族に会いに行き、親族も私に会いに来ている。昨年姉が死んだときも葬式にウルムチへ行った。

カラコルには一九五八年や一九六二年に新疆から移民してきたウイグル人、キルギス人、カザフ人、ロシア人がいて、今でも彼らと往来がある。カラコルのティニスタノフ大学で漢語を教えているのは、私と同じく一九六二年にここに来た新疆出身のキルギス人で、年齢は私とそう変わらない。彼は北京の中央民族大学で学んだ経験があり、私より漢語普通話ができる。

現在、カラコルには約二〇〇家庭のダウンガンが暮らしている。清末に弾圧から逃れて移住した家庭がほとんどで、それ以降にやってきた者は少ない。私が知っている限り、一九五八年前後にこの地に来た者は六〜七家庭、一九六二年頃に来たのは三家庭だ。カラコル市内より周辺にある村にダウンガンは多く暮らし、農業に従事している。例えば五〜七キロ離れたアルドックには五〇〇家庭くらいが居住する。すでに中国での生活を知らない世代が住民の多くを占め、それゆえに民族の垣根を超えてウイグル人もダウンガンも、信仰を同じくする者、同じ歴史体験を共有する者が日々の往来をして、緩やかな繋がりを維持してい

る。そこがカラコルの良いところだ。

(三) ウズベキスタン、タシケントの ウイグル人学者たち

ウズベク語とウイグル語は極めて近い言語で、ウズベキスタンに移住したウイグル人は、あまり抵抗なくウズベク人に同化している。実際にウズベキスタン在住のウイグル人の多くが、民族登録を「ウズベク」に変更しており、ウズベキスタンのウイグル人はあまり自分を「ウイグル人である」と主張しない傾向がある。他方、カザフ語とキルギス語は、同じテュルク系言語ながらウイグル語と近くはないため、それらの国に住むウイグル人は同化されず、居住地も生活の便宜を考慮して比較的集住している。また、ウイグル人が幾つかの地域に集住しているアルマトイやビシケクとは違い、ウズベキスタンのウイグル人は分散しており、首都タシケントの場合、ウイグル人が辛うじて集住している地域は、市中心部から南東方向の郊外クイルク (Kuituk) やベクティミル (Bektemir)、南西方向のセルゲリ (Sergei) の三カ所という比較的狭い範囲内だけである。市中心部にも昔はウイグル人集住地はあったが、一九六六年の大地震で建物が倒壊し再開発対象となり、住人は郊外に引越したという。

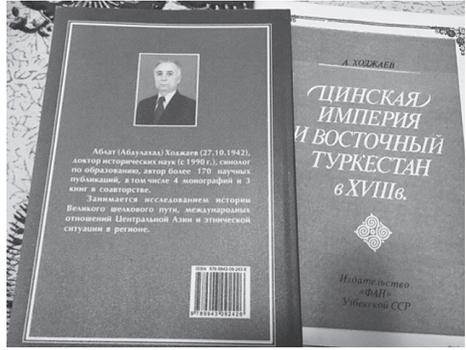
ウズベキスタンがソ連から独立する前からタシケント

には「ウズベキスタン社会主義加盟共和国ウイグル文化センター」があり、その組織は現在では「ウズベキスタン共和国ウイグル文化センター」となっている。それ以外にタシケント市ベクティミルにも独立後に作られた「ウイグル人文化センター」が存在し、祝日や民族記念日に皆が集まって講演会を催すなどの活動を続けている。ここには一五〇〇人ほどのウイグル人が集っている。

二〇〇六年、筆者はウズベキスタンの首都タシケントで三人のウイグル人学者を訪ねた。彼らはいずれも一九六一年から一九六三年までの間に新疆から中央アジアへ移住しており、ソ連社会で苦学して学者となっている。以下、歴史学教授アブレット・ホジャエフ (Ablet Hojaev) 氏の証言を紹介する。

歴史学教授アブレット・ホジャエフの口述記録 (二〇〇六年三月、於アブレット教授研究室、漢語普通話で直接対話)
一九四四年カシユガル地区コナシエヒル (疏附県) のベシケリム生まれだが、一九五九年から一九六一年まで新疆イリに住み、イリからタシケントにやって来たので、もうイリ出身ということにしている。

カシユガル地区で教員だった母は、私が三歳の時に亡くなり、幼かった私は父方の祖母宅に預けられた。父は再婚したけれど、継母も難産が原因で亡くなった。兄弟はいない。



ホジャエフ教授の著作『清帝国と東トルキスタン』

一九五四年から一九五五年の間、父が上海で仕事をしていたため私も上海で暮らし、その地の漢人の小学校で一年間学んだ。父の仕事の都合でウルムチに引越すと、今度はウルムチの漢人学校に八年間通った。だから私はウイグル語以外に漢語ができる。ロ

シア語を習得しないと良い職業には就けないという現実だった。私の周りにはウイグル人やウズベク人ばかりで、互いにウイグル語やウズベク語で話をするから、ロシア語学習の環境はなかった。父の友人に事情を話すと、その人の経営する菓子工場で雇ってくれた。勤工儉学だ。タシュケントを離れてキルギスのタラス区にあるキルプカ村で暮らし、ロシア語が飛び交う職場で働いた。その地の住民はロシア人とドイツ人、キルギス人で皆、ロシア語で対話していた。

夜間学校にも一年間通った。仕事が終わった夜六時から授業が始まる。日曜日にはロシア映画を観に行った。映画の中のロシア語は訛りのない標準語だったから、言葉の学習のために繰り返し観た。

シア語とウズベク語はウズベキスタンに来てから習得した。
一九六一年、一七歳の時、親戚と一緒にタシュケントに来た。当時、多くのウイグル人がソ連のパスポートを持っており、それさえあれば親戚一同をソ連に呼び寄せられた。父は私たちの越境から一年後にタシュケントに来るはずだったが、不運なことに叶わず、私がここに来て四年後にイリで亡くなった。父が死んで頼れる人がいなくなり、私は経済的問題から苦学した。

タシュケントで暮らしてすぐ分かったのは、ソ連ではロ

私は子供の頃に習得した漢語を生かせる学問をしたかった。この分野ならロシア人に負けない自信があった。漢語を使う学問をするためには東洋言語学部に入學すべきだが、中国国籍では入學できないと知った。理系分野なら国籍問わず入學できたが、文系学問には制約があった。そこでソ連に移住して二年後に完全に中国国籍を放棄し、さらに二年後ソ連国籍を取得した。全ては大学進学のためだった。私はタシュケント大学の東洋言語学部東洋国家歴史専攻に入學し、そこを卒業した。東洋言語学部は現在では独立して、東洋言語学院となっている。

大学を出ると徴兵を受けて二カ月間軍隊に行った。大学院進学を希望する旨を上官に伝えたら、本来二年間であるはずの兵役を、それ以降は免除してくれた。今の時代と異なり、あの時代のソ連では学者、専門家は尊敬され、給料は国家の共産党幹部より高かった。だから研究者になって生活を立てたいと切に願ひ、一年間働いて生活費を作り、今度はモスクワ科学アカデミー・東洋学研究所に大学院入学し、一九七〇年から一九七三年までそこで学んで清代を研究し、ジュンガルやヤクブ・ベクについての論文を書いた。卒業してからの数年間は同大学研究室に勤務し、その後は国からの任命でタシケントに戻り、ウズベキスタン社会主義加盟共和国科学アカデミー東洋学研究所に就職した。

ソ連邦崩壊後、ウズベキスタン政府から外務省政治課所属の戦略研究所に呼ばれ、一九九四年から二〇〇〇年まで勤め、その間の一九九六年から一九九九年までは在北京大使館の文化交流事業担当大使として赴任もした。

タシケントではホジャエフ教授以外にも、二人のウイグル人老学者に出会えた。共に一九三八年生まれで、一九六〇年代に中央アジアへやってきた人たちである。

ヤクブ・アユップ (Yakup Ayup) は新疆師範学院を卒業し、グルジャ師範学院で教員を務め、一九六二年にソ連領

カザフスタン・アルマトイに逃れた。一九六五年ウズベキスタンに移住し、ウズベキスタンの大学に入り直して五年間学び、その後タシケント交通学院で教員を務め、インタビュー時は定年退職しており年金生活者であった。「中国共産党が新疆に入ってからというもの、身内に逮捕投獄者が多い家庭はない。私の父の兄は反革命罪で二七年間の懲役が言い渡され、出所して間もなく死んだ。知識人家庭では多くが中国共産党政権に不安を抱き、ソ連領に逃亡した」。

イリハン・トフティ (Iltihan Tokhti) は中国共産党政権下になつてから新疆学院を卒業し、その後ソ連圏へ。インタビュー当時、ウズベキスタン国立博物館で歴史学者として働いていた。「私は「民族主義者」「資本家」とのレッテルを貼られ、五年間ウルムチで労働改造を受けた。それが原因で一九六三年にアルマトイに逃れた」。

二 棄民か移民か——トルコ・カイセリ「トルキスターニ村」のウイグル人

一九六二年「伊塔事件」前後に、新疆から中央アジアへ多くの人々が越境して行ったケースは中国でも比較的知られており、それなりに研究にも蓄積がある。しかしながら、次に述べる一九六〇年代前半にアフガニスタンへ越境

し、最終的にトルコで定住したウイグル人集団については、全く知られていないと言っても過言ではない。

トルコの中部、カイセリ市の中心部から北東部に位置するカイセリ空港の近くには、大規模なウイグル人定住者集落「トルキスターニ村」(ウイグル人集落)が存在する。

中華人民共和国建国後、最初にトルコへ大規模なウイグル人亡命者がやってきたのは一九五〇年代初頭で、中華人民共和国政府の新彊省官僚であったエイサ・ユスブ・アルプテキンやムハンマド・イミン・ボグラ (Muhammed İmin Bugra) らが、インドを経てトルコに亡命した。この時の亡命者は首都アンカラや商都イスタンブールに居を構え、カイセリに定住する者はいなかった。トルキスターニ村の形成は、一九六〇年代に新彊ウイグル自治区からアフガニスタンを経てトルコにやってきた約三五〇人のウイグル人が、トルコ政府の援助で当地に土地を与えられ住み着いたのが発端である。

カイセリには一九六〇年代の定住者が結成した互助組織「東トルキスタン・文化と扶助の協会」事務所があり、新規亡命者の定住と生活安定化を援助している。同組織の現在のリーダーはセイト・トゥムテュルク (Seit Tunturk) である。彼の父は一九六一年、新彊ヤルカンドからアフガニスタンへ出国し、その後、一九六五年にトルコに亡命した。彼はその途上カーブルで生を受けたという。「アンカ

ラに到着した時の私は、まだ一歳の嬰兒だった」。セイト・トゥムテュルク曰く、「現在カイセリに家があり定住しているウイグル人は約一二〇〇人で、うち三〇〇人は戸籍をこの地に置いていてだけで、実際は地方に出稼ぎに行っている」。「二〇〇九年ウルムチ事件発生後、ウイグル人のトルコへの逃亡が相次いで起こり、二〇一四年が最大規模で、その年だけで七千から八千人のウイグル人がトルコに逃亡してきた。カイセリでは亡命者住居が足りず、市が取り壊し予定のアパートを無償提供し、対応した」。カイセリは、トルコに亡命してきたウイグル人が最初に身を置き、この国に「慣れる」トレーニングの場となっている。

以下、トルキスターニ村の最初の定住者となったウイグル人、セイト・リズワン (Seit Rizwan) の口述を記す前に、彼の越境した時期の政治的背景を少々解説しておきたい。

一九五六年中国の周恩来首相はアフリカ諸国を歴訪し、帰途の一九五七年一月にアフガニスタンを訪れ、ザーヒル国王やダーウード首相と会談した。中華人民共和国要人による最初のアフガニスタン訪問であった。同年一〇月ダーウード首相は北京を訪問し毛沢東と会談。一九六〇年八月には陳毅外交部長がアフガニスタンのカーブルで「中国・アフガニスタン友好相互不可侵条約」に調印し、同年一二

月その批准書を北京で交換した。

同時期、中国とインドはチベットを巡って関係が悪化し、一九五九年九月には国境線で中印武力衝突が起き、一九六二年一月には大規模衝突に発展した。西の国境の安定を図りたい中国共産党は、一九六三年六月アフガニスタンとの国境条約草案をカールブルで作成、一月には北京で「中国・アフガニスタン国境条約」に調印し、一九六四年一〇月ザーヒル国王が劉少奇国家主席の招きで北京を訪れ、友好ムードを演出した。セイト・リズワンさん等が参加した「新疆在住ウイグル人のアフガニスタン在住親族訪問団」は、友好ムードを演出したい両国の思惑から結成された。そして「トルキスターニ村」への定住者は皆、この訪問団参加者であった。

セイト・リズワンの口述記録（二〇一五年と二〇一六年に訪問。於セイト氏自宅。ウイグル語⇄日本語の通訳付で対話、一部トルコ語で直接対話）

アフガニスタン定住ウイグル人を親族に持つ新疆ウイグル自治区のウイグル人に、親族訪問を許可するとの内容が一九五八年頃『新疆日報』に掲載された。私の父はその話を信じて、北京のアフガニスタン大使館に「親族訪問」のための申請に出かけ、ペルシャ語の申請書に記入してきた。一カ月後、記載した親戚の住所とその人物が実在だと

確認できたとのことで、アフガニスタン大使館は許可証を送ってきた。私たちは親族一六名で申請し、出国前に一人が死亡したので、一五人で出発した。

出発前に公安局で四回ほど、出国する家族の代表者が呼び出され、質問や詮索を受けた。アフガニスタン訪問の第一陣は五月頃にカシユガルを出発。我々ヤルカンドから出発した第二陣は六月初頭に出発し、カシユガルとスバシ（クチャ）で一泊し、タシユクルガンの国境線をめぐりた。トラック三台に二五家族、一二〇名くらい。十数名で出てきた家族もいれば、一人で参加した者もいた。出国まで二人の漢人と一人のウイグル人の兵士が付き添った。



在北京アフガン大使館からの手紙
(コピー)



セïト・リズワン氏(右)、セïト・トゥムテュルク氏(左)
(2015年5月筆者撮影)

サインをすると、公安から前もって渡されていた出国カードも没収された。中国側が発行したパスポートなどのドキュメントは何もなく、それらが発行もしてくれず、手元にあるのはアフガニスタンの招聘書だけだった。いったいなぜそんな不可解な措置をしたのか、いまもって全く理解できない。

昼間には国境越えをさせず、野営をして夜中に国境線に向かって出発した。小さな吊橋があり、夜にそれを越えた

タシユクルガの国境に着くと、漢語で書かれた書類が各家族の家長に配られ、サインを求められた。誰も漢語を解さず、「これは一体どういう意味の書類なのか」を兵士に問うと、「無事出国した」という意味の文書だ」という。

ことを記憶している。吊橋を越えると兵士たちが「あつちの方向に行け。その碑を越えたらアフガンだ」と指さした先には、英語、ウイグル語、漢語で書かれた国境を示す碑が建っていた。今から思えば夜間の出発は、帰り道を覚えさせないためだったのではないかと思っている。アフガニスタン領に入ったのは六月一九日だった。

馬やロバとともに八三日間。三カ月近くも歩いた。持ち物は敷布団だけで掛布団はなく、出国時に一八センチぐらいの丸い小さいナンが大人には一人五〇個、子供には一人三〇個が配られた。三カ月分には到底足りず、一行からは凍死や栄養不良で四人の死者を出した。私の弟や、マリヤム・ハンという名の人が死んだ。ロバに食べさせる物も無く、道中でばたばた死んだ。何年も人が歩いていない古い山道で、獣道のような道だった。きつと中華人民共和国政府がなくなつてから十数年、だれも両国間を往来する者がおらず、このように道が荒れたのだろう。一人しか通れない箇所もたくさんあった。ナンが無くなると、服の半分やボタンを切つて、アフガニスタンの集落で食べ物と交換してもらった。中国公安局から金銀の類いを持って行くのは禁止されていたからだ。本も持ち出し厳禁だった。

ワハン回廊をひたすら進み、アフガン軍が守るサルハード(Sarhad)という関所に着くとアフガン警察が事前連絡を受けていたようで、各家長が招聘書などの書類を集め、



トルコに着いた頃（中央右の髭を蓄えた男性が、セイト・リスワン氏の父、その左隣がエイサ・アルブテキン。1960年代）

政治的な活動はしないように」と伝えしてきた。アフガニスタンは生活を立てるには想像以上に貧しく、仕事を探すのも容易ではなく、様々な民族がいて民族関係も中国同様、とても難しい国だと分かっていた。ここでやっていく自信をすっかりなくして、数年経つと今

そこに記載されている親族家庭をチェックした。私たちはその後、バダフシヤンへ向かった。道中、パミール高原のキルギス人に服などを与えて雇って道案内をしてもらった。アフガニスタン政府も食物は与えてくれない、とうとう

一行は現地の農民が植えた豆を盗んで食べる有様だった。アフガニスタンの長年会つていなかった親戚の家に、ずっと居座るわけにはいかない。苦境を訴える私たちにアフガニスタン政府は、「ここに住むのはかまわないが、政

後の行く先を皆が本気で探し始めた。誰もがワハン回廊越えをしたあの旅程にうんざりしていたけれど、「ここにいるよりマシかもしれない」と、新疆に早く戻りたいと思う者さえいた。

出国時、私たちは亡命したわけではなかった。少なくともそのつもりだった。出国の際には、中国とアフガニスタンの友好関係のためにと鼓舞された。しかし、中国がパスポートを発給しなかったから、誰も故郷に戻ることは叶わず、他の地に行くことさえ困難を極めた。まさか何のドキュメントもなく放り出されるとは思いもしなかった。

アフガニスタンに親族訪問した人々のうち、一部がサルハード、バダフシヤン、カーブルなどの親族の家に定住したが、数は少なかった。私の父が代表としてカーブルにあった国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に話をし、一九六三年トルコ大使館に繋いでもらった。当時の在アフガニスタンのトルコ大使はカヤ・トプurl (Kaya Topurl) 氏で、彼が在トルコのウイグル人政治指導者（民族主義者）、ムハンマド・イミン・ボグラやエイサ・ユスブ・アルブテキンと連絡をとってくれた。人道的移民の手続きには最低一年はかかるとの説明があり、我々はずつと知らせを待ち続けた。国連難民高等弁務官事務所はジュネーブ等にも連絡し、旅行証を発行してくれて、一九六五年一〇月に二三五人が飛行機三機でトルコに向かった。搭



トルコに着いた頃（中央右の髭を蓄えた男性が、セイト・リズワン氏の父、その右で幼子を抱え立っているのがセイト・リズワン氏。1960年代）

アに移住した人もいるが、ほとんどがトルコに行った。無国籍状態だった私たちは、トルコで国籍を取得した。アフガニスタンから来たとの証明しかないから、原籍記載はできなかつた。

やごむに

本稿では一九六〇年代初頭、文化大革命が始まる前の頃、

乗の際には国連から担当官が同行した。あとで知ったことだが、一九六七年頃にもアフガニスタンからトルコに移住した六七名のウイグル人がいた。アフガニスタン親族訪問団の中にはサウジアラビ

旧ソ連とアフガニスタンに出境し、中国に戻らなかったウイグル人と回民のケースを、定住先ごとに象徴的と思われる事例を挙げて背景説明とともに紹介した。

調査がまだ不十分であるため本稿では言及できなかったが、この一九六〇年代にはもう一つ、特筆すべき「新疆人」の出境事例が存在する。それは中ソ関係悪化に伴う新疆在住白系ロシア人（中国「ロシア族」）の香港脱出と、その後にオーストラリアやアメリカへ渡って定住したケースである。ロシア革命で中華民国に逃れ、さらに中華人民共和国建国後に香港を経由し、自由主義諸国に散っていった白系ロシア人たちは、香港赤十字社が受け入れし、香港ハリストス正教会もそれを援助し、第三国に逃れていった。現在、オーストラリアのシドニーやアメリカのサンフランシスコには、彼らのコミュニティが存在する。これについては別途どこかで言及したい。

注

〔一〕 中央ユーラシアには、古くから複数のウイグル人コミュニティが存在する。例えばインド、中国、パキスタンが国境紛争を続けているカシミールのような地にもウイグル人コミュニティは存在し、一九六六年に当地を訪れた鷲見東観は、その地で撮影したウイグル商人の写真を著書

『カシミールの歴史と文化』に挿入し、次のように説明を記している。「中共、インドの国際関係悪化以来、カラコルム山脈、パミール嶺を越える古代からの世界最高の通称ルートは途絶している。スリナガル第九橋畔「ヤールカンド・セライ」は中央アジア出身者の居住区である。写真中央はホータンから来た商人（略）。鷲見東観は愛知教育大学教授でインド哲学が専門。パキスタンのウイグル人コミュニティについては、近年その地を調査したイタリヤ人大学院生アレックスandro・リッパが言及していた。

〈2〉伊塔事件時に新疆から流出した人口については諸説あるが、新疆ウイグル自治区地方誌編纂委員会『新疆通誌』第二六卷 僑務誌（新疆人民出版社、一九九四年、二一頁）や『新疆通誌』第一五卷 政務誌・政府（新疆人民出版社、二〇〇六年、六五四頁）では六万を超えるとあり、この記述が中国政府の公式見解といえよう。この数はウイグル人のみならず、カザフ、キルギス人、回民などを含めた数である。

〈3〉カザフスタンのウイグル人は、総人口の一・四%で約二五万六千人、キルギス共和国のウイグル人は、総人口の一・一%で約六万三千人、ウズベキスタンのウイグル人口は不明で、一七万人という説から四万五千人ほどとの説まで様々である。カザフやキルギスは政府が民族別人口を發表しているのに対し、ウズベキスタンも公表してはいるものの民族的に極めて近いウイグル人自身が民族登録を「ウズベク」としているケースが多く、どのくらいの数が「ウイ

グル人」というアイデンティティの下に暮らしているか詳細は分からない。<http://worldpopulationreview.com/countries/kazakhstan-population/>（最終確認日二〇一八年一月一日）〈4〉朱培民『二〇世紀新疆史研究』（二九三頁）によると、バイ県以外にも「トクス、クチャ、アクスなどでも千人近くが餓死し、新疆生産兵団の労働改造所囚人も食糧難で千人近くが餓死した」とある。

〈5〉李琪『中亞維吾人』（八二頁）によると、チャガントカイ県でも総人口の五〇%がソ連側に越境したという。

〈6〉ズイヤ・サマディは一九一四年新疆ヤルカンド生まれ、二〇〇〇年カザフスタン没。代表作に、一九三〇年代を描いた全四巻の歴史小説 *Yillar S'ri*（『年月の秘密』第一巻一九六七年、第二巻一九七一年、第三巻と第四巻一九八九年、カザフスタン Yuzhuchi 出版社）、一九四〇年代を描いた全二巻の歴史小説 *Exmet Ependi*（『アフメット先生』一九九五年、カザフスタン Yuzhuchi 出版社）がある。

〈7〉李琪、前掲書、八三頁。

〈8〉アブレット・ホジャエフ（Abilar Holjaev）教授は一九四二年生まれ。著作には *Цинская империя, Джунгария и Восточный Туркестан (Колон ... чин политика. Китай во второй половине XIX в.)* (Наука, 1979) などがある。

〈9〉セイト・リズワン氏の主張するとおり、いくら大躍進政策という政治混乱期とはいえ、なぜ中国が自国民をパスポートもなく国外に出国させたのか法的説明がつかないのだが、この「棄民事件」については、中国政府が公文書

を公開しない限り、その理由は解明されないであろう。

参考文献

〈漢語〉

李丹慧『新疆蘇聯僑民問題的歷史考察』『歷史研究』二〇〇三年第三期

李德華『移居国外的新疆人』新疆人民出版社、二〇一三年

李琪『中亞維吾人』新疆人民出版社、二〇〇三年

厲声主編『中國新疆歷史與現狀』新疆人民出版社、二〇〇三年

侯松濤『民族性突發事件的應對與処置——以新疆伊塔事件為例』『北京科技大學學報社會科學版』二〇〇七年六月第二期

三卷第二期

黃定天『中俄關係通史』黑龍江人民出版社、二〇〇七年

朱培民『二〇世紀新疆史研究』新疆人民出版社、二〇〇〇年

〈日本語〉

前田耕作監修、関根正男編著『日本・アフガニスタン関係全史』明石書店、二〇〇六年

水谷尚子『キルギス共和国のウイグル人』『麗澤大学紀要』第九四卷、二〇一二年

新免康『カザフスタンのウイグル人社会における学校教育と民族文化』『歴史と地理』第五六六号（『世界史の研究』第一九六号）山川出版社、二〇〇三年

『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイ

デンティティに関する調査研究』平成十五年度～平成十八年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書（研究代表者：新免康）、二〇〇七年

水谷尚子『アメリカ「ラジオ・リパティ」「ボイス・オブ・アメリカ」「ラジオ・フリー・アジア」のウイグル放送と、その職員たち』

岡奈津子『カザフスタンのウイグル人』

新免康『フェルガナ地域のウイグル人』

〈英語〉

Alessandro Rippa, From Uyghurs to Kashgari (and back?): Migration and Cross-Border Interactions Between Xinjiang and Pakistan http://crossroads-asia.de/fileadmin/user_upload/publications/WP_23_Rippa_From_Uyghurs_to_Kashgari.pdf (最終確認二〇一七年九月一日)

〔付記〕ウイグル人名表記については、トルコや中央アジア

各国、新疆など居住地によって綴りや表現が異なり、こ

こでは調査地の音に依拠した。したがって「ユスフベク」や

「ユスブ」など発音や綴りの「揺れ」が生じている。